

# NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信



チェルノブイリ原発事故20周年祈念公開座談会



ゴメリ医科大学学生の受入研修風景



絵文字はジュネーブ在住の画家猪又由加氏の画です。ウクライナ語で「チェルノブイリ」と筆書きされた上に国旗につかわれている青と黄の2色が配分され、被災者が心身共に健康であることを祈念しています。

- Works** ..... チェルノブイリ原発事故20周年記念事業
- People** ..... カザフスタンから来た医師のご紹介
- Report** ..... チェルノブイリ・カザフスタン関連医師の受入研修
- Report** ..... 派遣・フォローアップ事業報告
- From Korea** ..... 被爆者医療等研修～韓国から医師等を招聘～
- Report** ..... 韓国への専門家派遣
- Information** ..... 平成18年度外務大臣表彰受賞  
核禁会議がNASHIMへ活動助成金を寄付  
第7回永井隆平和記念・長崎賞候補者募集のお知らせ





## チェルノブイリ原発事故20周年記念事業

1986年4月26日に発生したチェルノブイリ原発事故から20年が過ぎました。NASHIMではチェルノブイリ原発事故20周年記念事業として、チェルノブイリ関係諸国への医療協力を精力的に携わってきた関係者による公開座談会と毎夏のヒバクシャ医療研修に加えて、放射能汚染の最も深刻であったベラルーシ共和国のゴメリから4名の医科大学生を招聘して教育・研修プログラムを実施しました。また、彼らと長崎の学生、市民との交流会や長崎原爆資料館において日本チェルノブイリ連帯基金と共催のチェルノブイリ写真展を開催しました。



### チェルノブイリ原発事故から20年

山下俊一

1986年4月26日未明のチェルノブイリ原発事故から20年が経過しましたが、

周辺の汚染地域では500万人を超える一般住民が不安を抱えながら今なお生活しています。チェルノブイリの教訓とは一体何でしょうか？それを取り上げたのが、今回のNASHIM主催による20周年記念事業の一つである公開座談会です。日本を代表するチェルノブイリへの支援協力活動を通じて、チェルノブイリ20年目の現実と今後の支援活動についての展開が被爆地長崎の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で語られました。

20世紀後半から狂気の核開発競争が繰り広げられ、エネルギー資源状況の変化や激増する人口問題も絡み、先進国を中心に国際社会は原子力時代に入りました。この原子力時代の幕開けへの警鐘が人類史上最悪の惨禍となる、チェルノブイリ原発事故でした。当時は東西冷戦の渦中にあるため情報封鎖の劣悪な世界情勢が被害を拡大することになりました。その後明らかになった事実として放射線誘発と考えられる小児および若年者の甲状腺がんが多発し5000例近くが現地で手術されています。そしてその後遺症や精神心理的影響は深刻です。さらに事故直後の原子力発電所内で

の大量放射線被ばく者300名近くと、数十万にも及ぶ除染作業員の長期にわたる健康影響も懸念されています。このような渦中、唯一の被爆国日本の心と経験を生かすべく、チェルノブイリ被災者への継続した医療支援活動が行われてきました。被爆地長崎からも多くの関係者が現場への医療協力や支援活動に活躍しています。しかし、低線量慢性被ばくの実態解明や、その健康影響についての解析は遅々として進まず、長期にわたる注意深い経過観察と医療協力が必要です。

大量かつ広範囲の放射線被ばくという人類史上初の事象に対するこの20年間における後手後手の対策対応の中で、低線量被ばくの不確実な領域での長期にわたる健康影響への地道で息の長い支援と協力こそが現地の被ばく者が望むものであり、広島、長崎に蓄積された原爆被爆者医療のノウハウを役立てることになります。チェルノブイリにおける緊急事態が過ぎると、被災者が軽視されたり、過去の負の遺産が放置されたりします。今回のチェルノブイリ原発事故後20周年の座談会では、この負の遺産を如何に清算するかが忌憚なく話し合われ、被爆地長崎から世界のヒバクシャへの医療協力に向けた継続こそが力であることが確認されました。今後ともNASHIMの活動基盤が充実し、大所高所から戦略的にチェルノブイリ医療協力が推進されんことを心から願います。



## 公開座談会

### チェルノブイリ原発事故から20年～長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力～

2006年8月2日、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の交流ラウンジにおいて公開座談会を開催しました。WHO 放射線専門科学官（現長崎大学大学院教授）の山下俊一さんをコーディネーターに、民間支援団体としてチェルノブイリ医療協力に関わってこられた笹川記念保健協力財団の榎治子さんと日本チェルノブイリ連帯基金の神谷さだ子さん、長崎大学大学院で疫学的な観点からチェルノブイリに携わってこられた柴田義貞教授に NASHIM の井石哲哉会長の参加を得て様々な意見を出していただきました。

「事故の影響による小児甲状腺がん多発のピークは過ぎたが、今後何が起こるかわからないため、支援継続の必要性があること」、「科学の進歩が危険と裏腹な現代で、被爆地長崎・広島役割は安心・安全を担保しながら科学の平和利用を進めるべきだ」という警鐘を鳴らし続けること」等が再確認され、被爆地の灯火をエネルギーに NASHIM の活動がチェルノブイリを起点とした次の国際医療協力や世界平和のために進んでいくことに期待が寄せられました。

※詳しい内容はチェルノブイリ原発事故20周年記念誌「長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み」や NASHIM のホームページをご覧ください。

#### ◆出演者紹介◆



#### 山下俊一さん (WHO 放射線専門科学官)

長崎大学教授として、チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトや種々のプロジェクトにおいてチェルノブイリ被災国の支援を行うと共に、NASHIM 事業の柱であるヒバクシャ医療貢献の中心的存在として活躍。WHO で放射線専門科学官として世界の舞台上で活躍した。



#### 榎治子さん (笹川記念保健協力財団元チェルノブイリ医療協力室長)

チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトを担当し、「チェルノブイリの母」と呼ばれるほど現地を頻回に訪問してプロジェクトの遂行にあたった。現地では今でも笹川記念保健協力財団が寄贈した巡回バスが活躍している。



#### 神谷さだ子さん (日本チェルノブイリ連帯基金 (JCF) 事務局長)

JCF の事務局長として、理事長の鎌田寛先生（「がんばらない」等の著作でも有名）と二人三脚でチェルノブイリ支援に積極的に取り組み、その継続的な支援は現地でも高い評価を受けている。現在も頻回にベラルーシ共和国を訪問し、現地に密着した支援を継続している。



#### 柴田義貞さん (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授)

放射線影響研究所の疫学部長として、チェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトにおいて事故の影響評価にあたり、事故後に小児の甲状腺がんが増加していることを示した。現在、長崎大学においてチェルノブイリにおける健康影響についての疫学調査を継続して行っている。



#### 井石哲哉さん (NASHIM 会長)

長崎県医師会長としての要職にありながら、平成8年から現在まで10年間にわたり NASHIM 会長としてカザフスタンやウクライナ、韓国を訪問するとともに、チェルノブイリ関係国をはじめとする多くの国からの研修医の受入を行うなど積極的に国際貢献に努めている。



## ゴメリ医科大学生の受入研修

7月28日から17日間、チェルノブイリ事故による汚染が最も深刻であったベラルーシ共和国のゴメリから4名の医科大学生を招聘して教育・研修プログラムを実施しました。

4人はまず、長崎大学生の案内で長崎原爆資料館や平和記念公園等を見学し、悲惨な原爆の実相を知って強い印象を受けたようでした。研修本番では長崎市原爆被爆者健康管理センターや日本赤十字社長崎原爆病院、財団法人放射線影響研究所を視察し、日本の医療設備・技術や被爆者に対する支援について学びました。また、長崎大学医学部では外科の外来見学や甲状腺の手術に立ち会ったほか、自身の血液検査や放射線量を測るといった経験もしました。恵の丘長崎原爆ホームでは、長崎で被爆された方の生の証言に真剣に耳を傾け、同じ被ばく者としてヒバクの不安に共感し、目に涙を浮かべて「これからの人生が平和であるように祈ります」と声をかける場面もありました。

帰国前にはチェルノブイリ医療基金の招きで長野県の松本も訪れました。

17日間という短い研修期間でしたが、非常に強い印象と医師を志すことへの新たな決意をもって帰国されたようです。

放射線障害という困難を経験した彼らが医師を目指して学んでいるということは、将来のベラルーシにおける放射線被ばく医療の大きな力になることと思います。

NASHIMはこれから彼らのような若い人材の育成にも取り組んでいきたいと思っています。



恵の丘長崎原爆ホーム



日本赤十字社長崎原爆病院



長崎市原爆被爆者健康管理センター

## 研修を終えての感想

マリナ イヴァンカ (ゴメリ医科大学6年生)  
Maryna Ivanchykavaさん

原爆の被爆者の方々が住まわれる原爆ホームを訪問した際、また8月9日の慰霊祭に出席した際に、その恐ろしい日のことをまざまざと感じました。私は涙が溢れ、心が痛みました。なぜならそれと似たようなことが私自身にも起こったからです。不幸は私の国、私自身、そして私の家族に降りかかりました。でもその不幸こそが私の将来の職業の選択の決め手となったのです。

日本での研修後、私は、私達2つの国の助け合い、特に医学の分野での助け合いがいかに重要で不可欠なものかを痛感しました。広島と長崎の悲劇から61年の月日が経ちました。この間に日本では多くの貴重な経験と知識が蓄積されました。私は、その有益な経験と知識に見習わせていただけることに対し、敬意と尽きせぬ感謝の思いを述べたいと思います。

タチアナ クラウチャカ (ゴメリ医科大学5年生)  
Tatsiana Krauchankaさん

私が日本で研修を受けることができるようご尽力してくださった皆様に、非常に感謝しております。

日本での研修は非常に印象深いものでした。

私は、各種医療機関や研究施設に近代的設備が完備されていること、それに医療関係者が患者に対して丁寧に接していることに感銘を受けました。原爆ホームを訪問したときには、弱者に対するいたわり、これほどの高齢者が何不自由なく生き生きと生活していることに驚かされました。小児科の病院でも、子供達が家にいるのと同じように感じられるよう、様々な工夫がなされていることに感心しました。

和食や茶道もとても気に入りました。  
ありがとうございました。



マリナ ジャリョナヤ (ゴメリ医科大学4年生)  
Maryna Zialionaya

NASHIMの皆様に、このような研修を準備していただいたことに対し、心よりお礼を申し上げます。

私達は、素晴らしい時間を過ごし、楽しみ、様々な人と知り合うことができました。その他、多くの時を医療施設で過ごし、その仕組みや住民への医療サービスについて知り、病院の機器のレベルの高さと、スタッフの高い専門性について納得することができました。この研修の後、私は医者であることがどういうことか、またその職業にはどんな責任が伴うのかを実感しました。この国での研修で得た印象は、長く私の心に残るでしょう。

ラムン ツェツェラウ (ゴメリ医科大学3年生)  
Raman Tsetserau

長崎市で私は、数え切れないほど多くの興味深く独特な場所を訪れた。例えば、原爆資料館、平和公園、長崎大学医学部、放射線影響研究所、NASHIM、多くの被爆者が住む原爆ホームなどである。特に印象深かったのは、当時の出来事の生き証人の話である。その話は私の心に長く残ることだろう。

拭い去れぬ印象を残したのは、原爆資料館である。これに似た場所は世界中のどこにも無い。そこには恐るべき出来事が目に見える形で示されていた。私は原爆の爆心地を訪れ、いかに多くの人々がその場所を訪れているか、そして人々がいかにその悲しみの記憶を大切に守っているかを見た。私を日本に招待してくれたNASHIMに対し感謝したい。

## ゴメリ医科大学学生と市民との交流

交流会は8月5日に国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で行われました。コーディネーターに長崎大学の高村助教授を迎え、NASHIMで招聘したゴメリ医科大学学生4名に長崎大学医学部から村上知彦さん、元春洋輔さん、茅野龍馬さん、活水高校から岩永礼美さんの参加を得て実施しました。

はじめに高村助教授からチェルノブイリ事故についての説明があった後、各学生がスライドを使って、自分たちの生活や取組みについて説明し、チェルノブイリ事故とは何だったのかということについて現状の再確認をしました。後半は来場者とのやりとりを交えてベラルーシの被曝医療の現状や被爆地長崎が取り組むべき今後の課題などについて意見交換を行いました。

ベラルーシを訪れたことのある元春さんは「ベラルーシの学生はアルバイトなどで医療に触れながら勉学に励んでいる。同じ医学生として凛としていて志が高いと感じた。また、戦争や侵略の歴史が長く、独立してからの歴史もまだ浅いので、みんなそれぞれに平和に対する哲学を持っていると思った。」と話しました。これに対し、マリナ・イワンチカワさんは「被ばくの痛みを味わったから、被ばくした人の気持ちかわかる。心理的な面からも支えてあげられる医師になりたい」、「医師になったらもちろんゴメリで働くが、もっと知識や経験を高めたい。長崎のみなさんが研修を受け入れてくれるなら、再び長崎を訪りたい。」と将来の夢を語りました。

最後に高村助教授は「NASHIMがこのような希望を持った医師、学生の方々に学ぶ機会や被ばく者医療について知る機会を提供することは、チェルノブイリ原発事故から20年経った今後も必要。できればこれからも将来被ばく者医療に携わる若い世代に人材育成の分野でNASHIMが長崎から情報を発信できればと考えている。」とまとめました。



研 修 日 程		
7/28	金	長崎着
29	土	長崎大学医学部学生の案内で原爆資料館等見学
31	月	血液検査(長崎大学医学部) 長崎大学医学部長表敬訪問
8/ 1	火	第二外科外来見学(長崎大学医学部・歯学部附属病院) 県医師会長、長崎大学長表敬訪問
2	水	長崎市原爆被爆者健康管理センター視察
3	木	自身の被曝線量測定(長崎大学医学部) 恵の丘原爆ホーム視察
4	金	交流会打ち合わせ
5	土	交流会
7	月	甲状腺手術見学(長崎大学医学部・歯学部附属病院) 日本赤十字社長崎原爆病院視察
8	火	原爆遺構見学
9	水	平和式典参列 財団法人放射線影響研究所視察
10	木	チェルノブイリ医療基金の招きで長野県松本市へ
13	日	帰国



# チェルノブイリ原発事故20周年記念関連事業

## チェルノブイリ写真展

昨年の7月下旬から8月初旬にかけての13日間、日本チェルノブイリ連帯基金と共催で写真展を開催しました。これは事故から20年という節目の年にあたって、一般市民の皆様には事故や事故後の状況について認識を深めていただくとともに、海外のヒバクシャ医療に携わる NASHIM や日本チェルノブイリ連帯基金について知っていただくために企画したものです。チェルノブイリ原発事故で大きな汚染の被害を被ったベラルーシの村人を撮影した本橋誠一さんの『無限抱擁』から60点の写真と NASHIM、日本チェルノブイリ連帯基金の活動紹介パネルを展示しました。

長崎原爆資料館のエントランスホールで開催されたこの写真展には開催期間中、約5000人の来場者が訪れ、真剣に展示写真に見入っていました。



## 出版

NASHIM は諸外国での放射線関係事故に関する図書の出版や長崎原爆関係図書の英訳出版、ロシア語の医学教科書出版などを行っています。2006年度はチェルノブイリ原発事故20周年事業の一環として、医学書と普及啓発冊子を出版しました。

### 医学書『ロシアにおける甲状腺癌の研究成果』（ロシア語）



事故後急激に増加した小児甲状腺癌の基礎的研究成果を長崎大学大学院原爆後障害医療研究施設（原研）の山下俊一教授とウラジミール・サエンコ助手、ロシアのオブニンスク放射線医学研究所のアナトリ・ツィーブ所長ら6人で共同執筆したものです。年間100万人に1人と言われる稀な小児甲状腺癌の病理診断基準や遺伝子異常の詳細を明らかにし、今後予想される成人の放射線誘発による甲状腺がん多発に備える早期診断・治療の教科書的な役割を現地で担うものと期待されます。

1000部をモスクワで出版し、7月に関係諸国の専門機関に配布したほか、100冊を長崎大学に置き、ヒバクシャ医療教育に役立てています。

### 『長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み』

チェルノブイリ原発事故から20年目を迎えた記念として出版したものです。2006年度に NASHIM が行ったチェルノブイリ20周年記念事業の報告に加え、事故の概要や事故後の現状、放射線に関する Q&A 等が盛り込まれています。

4000部を出版し、NASHIM の関係機関や全国の医科系大学等に配布する予定です。





## カザフスタンから来た医師のご紹介

私の名前はアイヌール・アキルジャンワと申します。私はカザフスタンから来ました。今回、3回目の来日になります。1回目は2005年3月、長崎大学で行われた若手研究者の会議に、2回目はその年の7-8月に NASHIM の研修でそれぞれ長崎に来ました。

これまでの日本での体験は、私にとってとても興味深く、有意義なものでした。それは実際の病院での仕事だけでなく医療システムといった多岐にわたるものです。特に被爆者医療における医師と被爆者との密接な関わりと予防医学の高いレベルに感銘を受けました。また NASHIM の研修プログラムでは、被爆者の健康影響についての調査がいかにも多角的に行われているかを目の当たりにしました。このような機会を与えてくれた NASHIM には改めて感謝したいと思います。長崎で得た経験は、その後の私の仕事にも応用できまし、その後も長崎大学の高村先生との共同研究を継続してきました。



そして2006年末、私は再び長崎に来る機会を得ました。

私の母国であるカザフスタンが、アメリカ、フランス、ドイツそして日本の優れた研究施設に人材を長期に派遣することになり、選考の上、日本の長崎大学には私が派遣されることになったのです。私の役割は、特に乳がんについての遺伝子解析の研究を長崎大学で行うことです。現在私は、長崎大学の原爆後障害医療研究施設（原研）で客員研究員として研究を行っています。この長崎で分子生物学や病理学を学べることは私にとって光栄なことです。

長崎に来て3か月がたちました。長崎について少しずつ分かってきましたが、まだまだわからないこともたくさんあります。現在、私は日本語を学んでいます。それは「言葉ができてはじめて、その国の文化が理解できるのではないか」と思うからです。これからも、宜しくお願いいたします。

### 〈2005年度 NASHIM の受入研修での様子〉





# Report

## チェルノブイリ・カザフスタン関連医師の受入研修

1993年から実施しているチェルノブイリ・カザフスタン関連医師・専門研修を今年度も7月21日から8月24日まで1ヶ月余りにわたって、チェルノブイリ国際医療協力事業を活発に行っている長崎大学医学部を中心に、財団法人放射線影響研究所や日赤長崎原爆病院、長崎市原爆被爆者健康管理センターなど NASHIM を構成する各機関で行われました。本年度で14回目となるこの受入研修にはベラルーシ共和国、カザフスタン共和国からそれぞれ2名、ウクライナ、ロシア連邦からそれぞれ1名の計6名が参加しました。彼らは「被ばく者医療で高い技術がある長崎で得た知識を自国で活かしたい」と意気込み、研修に臨みました。



平和記念式典参列

例年どおり長崎大学の原爆後障害医療研究施設(原研)でヒバクシャ医療の全体像を把握してもらうための共通の講義が2日間にわたって行われた後、病理学や疫学などそれぞれの専門分野に分かれての専門カリキュラムが始まりました。

研修の間には長崎原爆資料館の見学や平和記念式典へ参列するなど長崎原爆の実相についての認識を深めるとともに、長崎原爆で被害にあった多くの人々の冥福を祈りました。また、恵の丘長崎原爆ホームでは直接被爆者の証言を聞く機会が設けられ、天草のはまゆう療育園では、重症心身障害者に対するきめ細かな医療ケアを見学し、母国の現状との比較を行うなど、有意義な研修ができたようです。



恵の丘長崎原爆ホーム

今年度は受入研修期間中に「放射線医療科学国際コンソーシアム第2回長崎シンポジウム」が長崎大学で行われ、研修者6名もこれに参加し、より専門知識を深めました。研修生はどの方も、今後、ヒバクシャ医療あるいは放射線医療教育といった分野で各国において中心的役割を担っていかれる方々ばかりです。将来の国際医療協力分野における良きカウンターパートになっていただけるものと思っています。NASHIM では今後とも長崎大学を始めとした研修機関と協力しながら、本事業を発展させていきたいと考えています。

### 2006年度 チェルノブイリ・カザフスタン関連受入研修者名簿

国籍	氏名	性別	所属・役職・専門分野
ロシア	Pavel Rumyantsev パヴェル・ルミヤンツェフ	男性	オブニンスク放射線医学研究所 放射線外科上級研究員 放射線外科学
ウクライナ	Svetlana Galkina スベトラナ・ガルキナ	女性	ウクライナ放射線医学研究所 研究部部長 小児科学
ベラルーシ	Iryna Novikava イリーナ・ノビカワ	女性	ゴメリ医科大学 臨床検査医学主任 臨床検査学・免疫学
ベラルーシ	Andrey Bepalchuk アンドレイ・ベスパルチュク	男性	ベラルーシ国立医科大学 形成外科助手 形成外科学
カザフスタン	Assel Zhanatbekova アセル ジャナトベコワ	女性	セミパラチンスク医科大学 内科学講師 内科学
カザフスタン	Nariman Mukhametgalyiev ナリマン ムハメッドガリエフ	男性	カザフスタンがん・放射線研究所 細胞診部門主任 細胞診断学



## 研修後のレポート

### 研修結果に関するレポート

ベラルーシ共和国 ゴメリ医科大学

臨床検査医学主任 イリーナ・ノビカワ

2006年8月2日より、公衆衛生科で研修を受けた。この間大学病院の検査部で、治療及び研究目的で行われる臨床検査全般について知ることができた。研修中、免疫化学(血清)、生化学、遺伝、血液、輸血の各検査室を見て回った。免疫化学室では、ホルモン測定法、自己免疫関連病の患者の検査について知識を得たが、自分の専門が臨床免疫学なので、大変興味深かった。生化学室では、種々の生化学検査の機器について知った。どの検査室でも、分析前、分析、分析後の作業について、懇切丁寧に説明を受けることができた。検査部での精度管理についても、詳しく知ることができた。遺伝検査室では、PCR検査やサザンブロット法について学んだ。またフローサイトメトリーに関する興味深いレクチャーや検体に関する作業についても知った。個人的にも様々な研究を行うことができた。特に興味深かったのは、輸血検査室である。日本赤十字社長崎原爆病院の血液センターを訪問したり、脚部の血管の病気における再生医療に関する実験について聞いたり、幹細胞の抽出や培養の実験を見学することができた。最も多くの情報を得ることができたのは、この輸血部においてである。全体として、研修課程はよく考案されており、職員の親切さ、その専門性の高さ、検査室の臨床データを惜しげもなく与えられるレベルの高さと善意に支えられていた。ゴメリ医科大学に帰った後は、教育や治療においてこちらで感心した幾つかの要素を取り入れてみたい。NASHIMに対して研修の機会を与えてくれたこと、また研修期間全体におけるサポートについて感謝の意を表したい。



日本赤十字社長崎原爆病院

### 長崎での研修レポート

カザフスタン共和国 カザフスタンがん・放射線研究所

細胞診部門主任 ナリマン・ムハンメッドガリエフ

2006年7月22日から、長崎市の平和公園、爆心地公園、如己堂、原爆資料館、平和祈念館を見学し、原爆による悲劇に関して、強い印象を受けた。またいくつかの表敬訪問を行い、被爆者に対する援助を行う研究機関、医療機関を見学して回った。



長崎大学での講義

7月31日、8月1日は、原研内科・病理・国際・疫学の講義を受けた。

8月2日から22日まで、長崎大学医学部原研病理および大学病院の病理部で研修を受けた。研修期間中、200名以上患者の様々な部位の腫瘍の組織標本、パパニコロウ染色による400名以上の患者の様々な部位の腫瘍の標本を観察した。その他に、パパニコロウ染色や免疫細胞染色、免疫組織染色の手法について、またフローサイトメトリーやPCR、DNAの抽出、シーケンス、プライマー選別などについても学んだ。大学図書館が契約しているインターネットサイトの文献も活用した。

そのような機会を与えてくれたNASHIMに深く感謝している。

関根先生、山下先生、朝長先生、高村先生にお礼を申し上げたい。

研究員のサエンコ夫妻、病理部の穴見先生、院生のナターリア、同郷のセリック・メイルマノフおよびタマール・ジュヌソヴァにも感謝している。みなさん、ありがとうございました。



## カザフスタン共和国アルマティ・セミパラチンスク派遣記録

長崎大学移植・消化器外科（旧第二外科）

前田 茂人

今回2006年5月25日から6月2日まで、NASHIMの一員としてカザフスタンへ派遣させていただいた。カザフスタン第一の商業都市アルマティ市と被曝地域であるポリゴンの近くのセミパラチンスク市を中心に、ジュネーブWHO 出向中の山下俊一先生と公衆衛生学の高村昇先生らと行動を共にした。

思い起こせば1999年の8月が最初の訪問であったが、それから2001年の医局長時をのぞき毎年訪問させてもらっている。当初は経済的に支援が必要だと思っていた街並みが、たくさんのビルディングや新築の家が建ち並び、道には高級車が数多く往来していて、少なくともアルマティは長崎よりも経済的には恵まれていると感じた。



1) 講演：アルマティへ着いた翌日5月26日には、Scientific Research Institute of Cardiology and Internal Disease で甲状腺疾患に対する診断から治療までの流れについて講演を行う機会を得た。循環器内科医と内分泌内科医がおられたが、甲状腺の手術に興味を持たれたようで有難かった。



2) 長崎大学賞：セミパラチンスク医科大学と長崎大学は姉妹校であり、今回、第7回目の長崎大学賞が学業優秀な学生さんへ授与された。授賞式に先立って「WHOの世界戦略」という山下俊一教授の講演が行われ、セミパラチンスク医科大学の学生さんはとても幸せではなかったろうか。この賞はセミパラチンスク医科大学学生の医学へのモチベーション向上に高く寄与していると感じた。



3) 検診・セカンドオピニオン依頼：これまでの日本人医療関係者による検診・診断および治療に関する医療支援は、特にセミパラチンスクでは大変感謝されている。山下教授の数多くのご尽力から始まり、土井先生（長期間滞在による細胞診指導）や坂本穆彦教授（杏林大学病理学）、林徳真吉先生（長崎大学病理学）らによる細胞診診断技術移転は軌道に乗っているようだ。私の役目であった超音波と細胞診技術指導、そして診断から治療までの流れに対する啓蒙活動も、遅々とではあるが、うまくいくものと期待している。



4) 表彰状贈呈：今回は特に素晴らしい表彰を受けた。これまでの長崎大学関係者全員への贈り物と思う。山下俊一先生にはカザフスタン共和国保健省から、高村昇先生と私には東カザフスタン保健局から表彰状をいただいた。

### 今回の出張を終えて

外科医として少しばかりの医学的貢献と心の橋渡しができたように思う。これまでの長崎とセミパラチンスクの絆がますます力強いものになってきたのは間違いない。この絆が長く続き、長崎からの被曝医療支援が世界へ発信され理解されることを祈願する。

最後に貴重な機会を与えていただきました NASHIM 関係各位の方々にお礼を申し上げます。



## 井石会長、齋藤副会長ベラルーシ共和国を訪問



2007年1月27日から約10日間にわたって、これまで NASHIM のチェルノブイリ医師・専門家招聘事業で研修生として来日した医師・専門家のフォローアップ事業として NASHIM の井石会長（長崎県医師会長）と齋藤副会長（長崎大学学長）がベラルーシ共和国を訪問しました。

井石会長と齋藤副会長は、まずベラルーシ共和国の首都ミンスクで国立ベラルーシ医科大学、甲状腺がんセンターを訪問し、ベラルーシにおける医

師・学生への教育の現状や甲状腺がんの治療の実際について現状を視察しました。ベラルーシ医科大学では、NASHIM、それに長崎大学のこれまでの貢献に対して感謝状が贈られました。

続いて訪問した甲状腺がんセンターでは、現在稼働している甲状腺がんの診断のための遠隔医療診断支援システムの見学を行うと同時に、2001年に第4回永井隆平和記念・長崎賞を受賞されたエフゲニー・デミチック氏に面会し、同国におけるヒバクシャ医療の現状について意見交換を行いました。さらにミンスクでは在ベラルーシ日本大使館の小池孝行氏を表敬訪問し、これまでの NASHIM の活動について報告するとともに、今後のベラルーシ共和国への支援の在り方について意見を交換しました。小池大使からは、これまでの長崎からチェルノブイリへの貢献について高い評価をいただき、今後は大使館の支援事業への助言をしてほしいという要請も受けました。

その後、井石会長と齋藤副会長はチェルノブイリ原発事故の影響を最も受け、小児甲状腺がんが多発した同国のゴメリ州を訪問しました。ゴメリ医科大学や国立放射線医学・環境研究センターを訪問して、これまで長年にわたって NASHIM で招聘した医師・専門家が現地のヒバクシャ医療の第一線で活躍している現状を視察しました。さらに、事故後住民が避難し、その後も放射能汚染があるため一般の人は立ち入ることができない発電所周辺の「30km ゾーン」も特別の許可を得て見学し、チェルノブイリ原発事故による放射能汚染が、事故から20年を経過した現在でも存在していることを目の当たりにしました。

なお、ゴメリ医科大学では、齋藤副会長に対し名誉教授号が授与され、これを記念して齋藤副会長による「長崎大学の歴史と放射線医学研究に対する取り組み」と題する特別講演が行われました。

今回の派遣事業は短い期間の訪問でしたが、NASHIM が長年行ってきた研修事業に参加した多くの医師・専門家がヒバクシャ医療の第一線で活躍している現状を確認することができ、非常に有益なものとなりました。

（レポート：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 高村 昇）





## 被爆者医療等研修

～韓国から医師等を招聘～

NASHIMでは、長崎が蓄積した原爆被爆者治療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果を生かして、韓国国内で在韓被爆者に対する援護事業を実施している医療機関などから医師等を招聘し研修を行っています。

今年度も、被爆者医療の研修と交流を目的として、11月、12月、2月の3回に分け、医療職6名、事務職6名の計12名が来崎しました。



NASHIM 会長訪問



原爆資料館見学

研修者はまず、長崎県庁や長崎市役所で職員から原爆被爆者行政の説明を受け、熱心に質問や意見交換を行いました。その後、長崎県医師会を訪問しNASHIM 会長である井石哲哉県医師会会長と懇談し、日本と韓国の被爆者医療の違いなどについて意見交換を行いました。

研修期間の前半では、長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼祈念館のほか、平和記念公園、原爆落下中心地、永井隆記念館などを訪れ原爆の実相など研修しました。

また、長崎市原爆被爆者健康管理センターにて被爆者健診の状況や施設などを見学しました。

後半では、医療職、事務職それぞれに別れ、日本赤十字社長崎原爆病院や財団法人放射線影響研究所、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎大学医学部・歯学部附属病院、長崎大学原爆後障害医療研究施設などで研修や視察を行いました。

研修者らは、「被爆地を訪れ、原爆投下は二度とあってはならないと実感した。帰国して周囲の人に伝えたい。」「韓国の被爆者は約2,400名いるが、一般の人たちは被爆者に対する関心が低い。研修で被爆者医療への理解を深め、韓国でこの経験を活かしたい。」などの感想を述べました。

### ○ 2006年度 韓国人医師等被爆者医療研修者名簿

回数	研修期間	所属	職名	姓名
第1回	11月5日～11月11日 (7日間)	嶺南大学附属病院	教授	金昌潤 キムチャンユン
		ソウル赤十字病院	診療部内科長	趙三権 チョウサンウォン
	11月5日～11月9日 (5日間)	韓国保健福祉部疾病対策課	事務官	姜仁俊 ガンインジュン
		陝川原爆被害者福祉会館	館長	朴貞姫 パクジョヒ
第2回	12月3日～12月9日 (7日間)	ワレス記念浸礼病院	内科部長	李浚相 リジュンサン
		セソウル内科医院	医師	尹汝鶴 インヨハ
	12月3日～12月7日 (5日間)	ソウル赤十字病院	院務課長	李秉燦 リビョンチャン
		大邱赤十字病院	院務課長	朴性直 パクサンジク
第3回	2月25日～3月3日 (7日間)	ソウル赤十字病院	医師	金恩那 キムオンナ
		嶺南大学附属病院	医師	申東薫 シンドンホム
	2月25日～3月1日 (5日間)	陝川原爆被害者福祉会館	生活指導員	李南鎮 リナムジン
		陝川原爆被害者福祉会館	生活指導員	延順英 インサンヨン



## < NASHIM 研修を終えて >

2007年2月25日から3月3日まで 'NASHIM 韓国医師等受入研修' に参加しました。



2007年1月に被爆者検診研究のために長崎を訪れたこともあり、また私が担当している患者の中にも被爆者がおり、今回の研修は被爆者に対する背景知識と原爆に対する理解を深める良い機会になりました。



4回の講義で原爆に対する基礎説明、放射線が人体に及ぼす影響及び放射線による発癌、そして最近取り上げられている放射線医療まで充実した説明を受けました。実は原爆に対する漠然とした恐怖を感じただけで実際の被害やそこで生き残った人々がどんな苦痛を経験したのかは全く知りませんでした。私にとって今回の研修は原爆の被害の実態を現実的なものとして実感することが出来る機会となりました。

いろいろな日程の中で私は落下中心地付近の見学が一番印象に残りました。原爆の悲惨な被害や被爆者の苦痛を考えたら二度とこのようなことはあってはならないと思います。'平和は長崎から' というメッセージは全世界の人々の無知や無関心から、原爆あるいは水爆の恐ろしさを絶えず思い起こさせてくれます。私たちが平和を求め続けていくことは孤独であり困難も伴いますが本当に重要な運動だと思われま

す。もう一つ、長崎で敬愛されている永井隆記念館と如己堂を訪ねた事も記憶に残っています。若くして闘病生活と戦いながら最後まで愛と使命感を失わなかった永井博士の一生を知り感銘を受けました。大変だった時期に多くの一般の長崎市民の方々もおそらく同じように立派に乗り越えたのではないかと思います。

私の兄弟も原子力研究所と関わりのある仕事をしているので個人的にも放射能のことを心配しています。今回の研修は個人的にもとても有益なものでした。

今回の研修で充実した教育と温かく歓待して下さった NASHIM 会長様、長崎県市の関係者の皆様、長崎大学、日本赤十字社長崎原爆病院、長崎市原爆被爆者健康管理センター、財団法人放射線影響研究所の先生方にもこの場を借りて感謝の言葉を申し上げます。



2007年3月15日 ソウル赤十字病院 内科 金恩那



## 韓国への専門家派遣

NASHIMでは、被爆者に対する相互理解と被爆者医療の進展を図るため、1999年から韓国へ医師等の専門家を派遣しています。今年度も1月から2月にかけて2回の派遣を実施し、韓国の医療関係者との意見交換や病院等の視察を行いました。

第1回目の派遣では釜山ワレス記念浸礼病院と居昌赤十字病院での被ばくしゃ医療セミナー開催と陝川原爆被害者福祉会館の訪問を行い、第2回目は2007年5月に健康相談等事業が実施される予定の馬山医療院で健診視察と事業を円滑に進行させるため健診担当者との協議を行いました。

派遣した先生方に報告をしていただきましたのでご紹介します。

※健康相談等事業…厚生労働省の委託による在外被爆者対策として、外国に医師等を派遣し、健康相談等を実施することにより原爆による後障害に対する不安の解消と健康の増進を図ることを目的とするもの。

## 韓国での講演と陝川原爆被害者福祉会館見学

長崎大学原研 難波 裕 幸

NASHIMの専門家派遣事業の一環として、韓国の釜山と居昌の医療従事者を対象として平成19年1月31日から2月3日に被ばく者医療に関する講演を行ないました。この講演の目的は、在韓被爆者の診療を行なっている韓国の医療従事者の方々に原爆と被ばく医療についてより深く理解していただくというものです。

原研病理の関根一郎教授と私が、現地の2病院（ワレス記念浸礼病院と居昌赤十字病院）でそれぞれ「長崎原爆と後障害」と「チェルノブイリ原発事故とNASHIM および長崎大学の国際医療協力」につ

いて講演しました。ワレス記念浸礼病院では約40名、居昌赤十字病院では、約15名の医療従事者の方々に熱心に拝聴していただき、また質疑応答を行いました。特に居昌赤十字病院では、院長をはじめとしてスタッフの皆様にご歓迎晩餐会を開いていただき、和やかに友好を深めることができました。

最終日には、長崎の原爆ホームに相当する陝川原爆被害者福祉会館に見学でき、80名の被爆者の方々の生活ぶりを見せていただきました。まだ100名以上の被爆者の方々が入居を希望して待機していらっしゃるという事実を知りました。

居昌赤十字病院と陝川原爆被害者福祉会館に、関根教授の撮影なされた花の写真数点が飾られることに決まり、今後、在韓被爆者の心の癒しになるとともにNASHIM被爆者医療の記念となることでしょう。



原爆被害者福祉会館館長と関根先生



ワレス記念浸礼病院



居昌赤十字病院



## 2007年度在韓被爆者健康相談事業に関する健康診断状況視察報告書

熊谷 敦史

### 健診施設の概要

2007度の健康相談事業は5月に慶尚南道馬山市で予定されています。馬山市は人口約43万人、韓国東南端中央部に位置した海岸都市で、釜山から約44kmの距離に位置しています。健診及び相談事業を行う馬山医療院は慶尚南道からの予算措置のもと、慶尚大学医学部により運営される国立民営形態の公共病院であり、ベッド数234で18名の医師により診療がなされています。主な医療設備としてMRI、CT、X線透視装置、消化管内視鏡を備え、血液・尿検査のほとんどの項目に対し、院内の分析装置で対応することができます。

2007年の在韓被爆者健診は2月1日から開始しており、1日あたり約12名の健診を行っています。健診専門の部署はなく、実際の検査は各診療科に依頼し、結果を診断検査医学課長の鄭賢珠医師が統括して受診者に郵送し、緊急の診療が必要な場合には電話で直接受診者に連絡をしています。

### 訪問

馬山医療院を訪問し、同院の院長をはじめ、健診に関与するスタッフと面談しました。

崔竣榮院長からは、「韓国に住む被爆者に温かい関心をもってくださっていることに感謝します。これから被爆者個人の心の痛みとともに韓日両国が抱えている歴史上の痛みをも克服する努力が必要です。」との挨拶をいただきました。「医療設備は大学に及ばないものの、できる限りの協力をしたい。」との言葉も頂戴し、院長をはじめ健診に従事するスタッフの本事業への強い期待が感じられました。

健診施設の視察のあと、健診総括担当者との実務協議として、相談事業開始までに行われる資料準備について、その内容・項目についての質疑を行い、加えて馬山医療院と大韓赤十字社との項目ごとの役割分担を検討しました。



### 協議による合意内容

健診結果については、馬山医療院所定の入力様式に従って同院で英語入力・出力されたもの及び外部委託業者から返信されたパターン図が相談事業に提供され、総合判定についてはハンダグ語で入力されているため、大韓赤十字社により日本語翻訳した上で提供される予定。また、前回の検査結果については、別紙として添付される予定です。

(※事務局：協議結果の詳細については紙面の関係上省略させていただきました)

### 謝辞

院長以下現地スタッフの本事業に対する関心・期待の大きさも十分に高まっていることが察せられ、5月の相談事業が円滑かつ実りあるものになることが期待された訪問でした。なお、今回の訪問・協議については長崎県と大韓赤十字社による周到な事前準備により、つつがなく行うことができましたことに感謝致します。

### 2006年度 専門医師等韓国派遣者名簿

	派遣期間	所 属	職 名	氏 名
第1回	1月31日～2月3日 (4日間)	長崎大学原爆後障害医療研修施設	病態分子解析分野教授	関根 一郎
		長崎大学原爆後障害医療研修施設	分子診断研究分野助教授	難波 裕幸
		長崎県原爆被爆者対策課	課長補佐	島村恵美子
		長崎・ヒバクシャ医療国際協力会	事務局	福田 恵子
第2回	2月6日～2月8日 (3日間)	長崎大学原爆後障害医療研修施設	分子治療研究分野助教授	塚崎 邦弘
		長崎大学原爆後障害医療研修施設	分子診断研究分野研究員	熊谷 敦史
		長崎県原爆被爆者対策課	係長	山口 勇次



## 平成18年度外務大臣表彰受賞

平成18年7月10日に平成18年度外務大臣表彰が外務省で執り行われ、NASHIMが表彰状を授与されました。この賞は近年の国際環境の変化と日本の国際的地位の向上および諸外国との相互依存関係の深化に伴い、多くの方々が国際関係のさまざまな分野で活躍し、日本と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている中で、特に顕著な功績のあった個人や団体を表彰するものです。今年度は個人36名と16団体が表彰され、NASHIMからは井石会長が授賞式に出席しました。



井石会長は「NASHIMは長崎原爆という負の体験を将来へむけた非核平和の礎石として、県と市の行政がヒバクシャ医療に携わる関係機関と連携し、一丸となって医療協力関連分野の事業に専念してきた。長年にわたる国際貢献に対して、外務大臣から表彰をいただき、大変名誉でうれしい。今後とも長崎原爆を被災された多くの犠牲者の御心に応え、また蓄積された被爆者医療のノウハウを世界の被ばく者救済のために活用するため、平和医療外交の一助としてNASHIM事業の更なる発展を期したい」と喜びを語りました。

## 核禁会議がNASHIMへ活動助成金を寄付

平成18年8月7日に核兵器禁止平和建設国民会議(核禁会議)全国集会が長崎原爆資料館ホールで開催され、NASHIMがほかの7団体とともにカンパ金を贈呈されました。

核禁会議は昭和36(1961)年に結成され、「被爆者に愛の手を！」を合言葉として被爆者の方々を救援するためのカンパ活動を長年行っています。結成以来、多くの施設に検診車、送迎用マイクロバス、車椅子、ベッド、医療器具などを毎年贈り続けています。長崎市の平和公園にある「平和の泉」を建設したのはこの核禁会議であり、また、国際的には韓国の陝川原爆被害者福祉会館に医療機器などを送り続けています。

今年度はこの活動助成金を医学図書『小児甲状腺学』(ロシア語)の増刷に利用させていただきました。核金会議のこれまでの被爆者救援活動や核兵器廃絶の取り組みに深く敬意を表しますとともに、改めて厚く感謝申し上げます。

## 第7回永井隆平和記念・長崎賞候補者募集のお知らせ



NASHIMは原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療および調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に、永井隆平和記念・長崎賞を贈っています。長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年度に創設し、今回が第7回目の実施となります。

この賞にふさわしい候補者がおられたら、5月15日までに推薦をお願いします。

